

## 愛と平和に生きる子供を育てよう

聖隷クリストファー大学社会福祉学部  
こども教育福祉学科 鈴木光男



### 『へいわってどんなこと?』『子どもたちが危ない』

マスク生活と重なるように、連日テレビや写真で見るのは悲惨な戦争の場面…これはもちろん最近のことを指して述べているのですが、ちょうど 100 年前にも同じ光景が広がっていました。スペイン風邪と第一次世界大戦。多くの人がこの酷似した光景については語っておられますが、この後に再び大震災や世界恐慌が訪れないことを祈るばかりです。

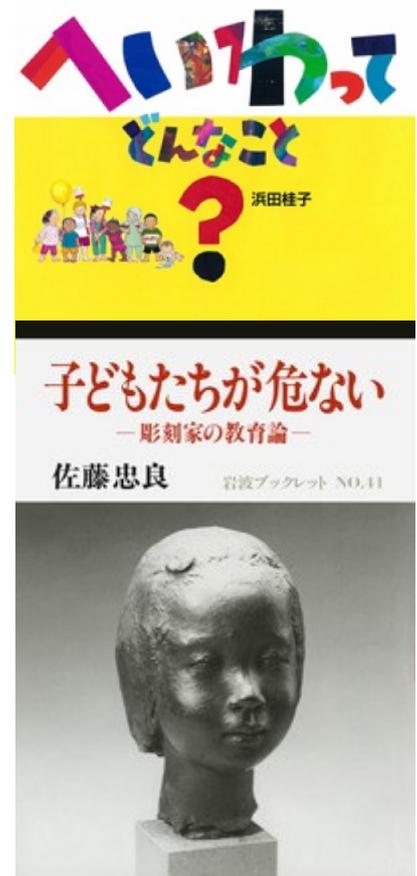
当時は様々な国で芸術教育運動が巻き起こり、日本では自由画教育運動が始まったところでした。芸術のもつ美的価値に重点をおく芸術教育が普通教育に導入されていったわけですが、この点についても最近の STEAM 教育やアート思考・デザイン思考への関心の高まりに共通な点が見い出せるような気がします。

このような中で、平和や美術教育について思い巡らさないわけにはいきません。

『へいわってどんなこと?』(浜田桂子・童心社)の最後は、「へいわって ぼくが うまれて よかったって いうこと。きみが うまれて よかったって いうこと。」で締めくくられています。正にウェルビーイング well-being。well-doing よく為すことではなく、ただただ being 存在すること。

well-being が経済協力開発機構 (OECD) 「Education2030 プロジェクト」で掲げられたキーワードであるのはもうここで語る必要はないでしょうが、この 1 年、どれだけ脅かされてきたことか…。マスク生活の中で子供たちの何とも言えない声がたくさんたくさん聞こえてきたように思います。

10 月末に文科省が公表した小中学校のいじめや不登校は過去最多となりました。この 1 年でいじめは 25%も増加し、不登校は 19%ほど増加したとのこと。国立成育医療研究センターが調査したところでは、子供の 1~2 割に中等度のうつ症状が見られたそうです(参照:共同通信 2022 年 6 月 29 日 <https://jp.reuters.com/article/idJP2022050501000369>)。文科省の公表後に出された静岡県教育委員会の調査では、いじめがこの 1 年で 70%も増加し、不登校は 25%増加だったとのこと(参照:静岡放送 SBS NEWS2022 年 11 月 5 日 <https://newsdig.tbs.co.jp/articles/sbs/196503?display=1>)。このような報告前後では、全



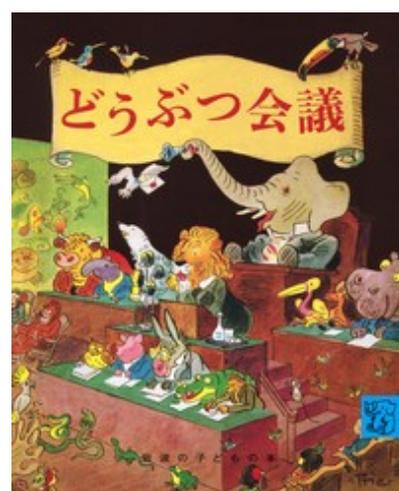
国が注目した悲惨なニュースが私の地元 静岡県で続きました。園児バス置き去り死亡事件、裾野市の保育士 3 名による虐待事件（参照：NHK NEWS WEB 静岡 NEWS WEB2022 年 11 月 30 日 <https://www3.nhk.or.jp/lnews/shizuoka/20221130/3030018449.html>）。そして年が改まろうという今、世間がクリスマスで華やぐ時期に入ったニュースは「黙食緩和でも殆ど会話がないう給食の時間」というものでした（参照：静岡新聞 2022 年 12 月 22 日 <https://www.at-s.com/amp/news/article/shizuoka/1168590.html>）。

この 1 年、世界で、全国で、地元静岡県で子供たちの悲鳴が聞こえてきそうなニュースが多くて思いは塞ぐばかりでした。このような子供をめぐるメンタルヘルスの危機的状況は他国でももちろん見られ、2021 年 12 月にはアメリカ政府の公衆衛生局長官から National States of Emergency 国家的な非常事態と認定できるという公表がなされました。

時代も社会もその背景は異なりますが、『子どもたちが危ない』（岩波書店 1985 年）と告げられた佐藤忠良氏の言葉が思い返されます。

### 『どうぶつ会議』『せんそうしない』

2022 年 12 月 24 日(土)、聖心女子大学を会場に開かれた「美育文化ポケットミーティング in 東京」は、私には『どうぶつ会議』（文 エーリヒ・ケストナー、絵 ヴァルター・トリアー、訳 光吉夏弥、岩波書店 1954 年）のように感じられました。子供を守ろうと立ち上がった心優しい動物たちの思いと、子供の造形や表現、探究活動にワクワクしながらじっと目をこらし寄り添う先生たちの思いが重なるように見えたからです。上述のような戦争をはじめとした危機を前に、ゾウのオスカーが「わしは、子どもたちがかわいそうなんだ」と耳をたれて言ったときの思いと重なるのでした。「ポケットミーティング」の登壇者や参加者一人一人が世界中の動物の代表と思うと、何となく楽しくなり、またそこで話し合われる保育・教育現場の話がとてもとても貴重なこと感じられました。



今回のテーマは、「探究がつなぐ明日の保育・教育」でした。同じテーマで、先ずは秋田喜代美先生（学習院大学文学部）が具体的な園での動画やたくさんの写真を交えてお話してくださいました。動画冒頭、繰り返し繰り返し坂に挑む 1 歳児の姿に、ただただ感心しました。何という探究心！私より遙かに小さな身体でも心は私よりずっと大きく豊かだと思われました。その後の絵の具の探究やまちぐるみの保育など、ワクワクが広がり、私自身も一緒に動きたくなる思いでした。正に「探究がつなぐ」一端を自分の身体を通して実感しました。山岸日登美先生（まちのこども園ペタゴジスタ）・木村典之先生（大分大学附属小学校校長）お二人の実践発表も素晴らしくて、ここに集えた幸せ・満足感に浸りきりました。



『どうぶつ会議』では、動物たちと政治家たちとサインをして取り決めを交わしています。その 5 番目は、「5 子どもを、いい人間にそだてることは、いちばんだいじな、むずかしい仕事であるから、これからさき、教育者が、いちばんたかい給料をとるようにする」でした。「ポケットミーティング」では「だいじな、むずかしい仕事」に魅力を見だし、日々子供たちと共に歩む先生たちの姿がありました。美術教育・芸術教育ってのは、やはり「いちばんだいじ」なんです。

「ちょうちょと ちょうちょは せんそうしない」で始まる『せんそうしない』（たにかわ しゅんたろう

文・えがしら みちこ 絵, 講談社 2015 年) の最後は、「つきと ほしも せんそうしない」。私たち人間、とりわけ大人にその愚かさを突きつけます。大人に、社会に、世界に余裕や余白がなくなっていると感じます。一人の人間の人生同様に、時間が経ち世が進むごとに余裕ができ、懐の大きな社会になるものと信じていましたが、どうもそうはなっていない。意識して、互いに努力をしなければならぬようです。

伊藤亜紗先生(東京工業大学)は、「利他とは『余白(スペース)』をもつこと」と語られています。これが先生の考える「利他」、「相手の可能性をひきだすために」「自分が変わるために」必要なのだと説かれています。私はこのお話がいたく腑に落ち、「なるほど、そうか!」と膝を打ちました。利他心については、例えば稲盛和夫さんが「私たちの心には『自分だけがよければいい』と考える利己の心と、『自分を犠牲にしても他の人を助けよう』とする利他の心があります。」と述べられています。こちらもなるほどとは思いつつ、何となく自分の思いとは違う感じを持っていました。それは例えば、最近会う人や電話で話す人から、「いつもピリカ(ゴミ拾い SNS)でゴミ拾いをありがとうございます。利他のお心が素晴らしい」みたいなことをよく言われるようになりました。しかし、言われれば言われるほど違和感。「自分を犠牲にして」という意識が私には皆無だからです。そのようなことから、「余白(スペース)」という一言にとでも納得をしたのでした。先日 12 月 10 日の NHK 総合「視点・論点」において、内田舞先生(ハーバード大学)がメンタルヘルスに“Altruism(他愛)”がよいのだと教えてくれました。それは例えば、ゴミを拾うといったちょっとしたことでよいのだそうです。それにより「自分は誰かのためになっている」と自らを価値づけられるということです。私も週末にゴミ拾い散歩しながら、何とも楽しい心地よさを味わっています。私のマインドフルネスであり、私の心に余白を生む行為なのは間違いなさそうです。

### 『戦争論』からの思い

余裕・余白なき世界は、とうとう信じがたい戦争を始めてしまいました。人が拾い切ることなんてできないほどのゴミ、がれきを生み出しています。いや、それどころかどれだけの人の命が失われ、人の涙が流されたか…。「人間は戦争をするものだ」と遊びの研究で有名なロジェ・カイヨワ(1913-1978 年)は『戦争論- われわれの内にひそむ女神ベローナ(Bellone ou la pente de la guerre)』(1963)の中で語っています。そしてカイヨワは、戦争を「原始的戦争」「貴族戦争」「国民戦争」「全体戦争」と大きく 4 種類に分けて論じているのですが、時代の変化に伴って、これら戦争の様態も変化してきています。今や地球規模・宇宙規模で問題となっており、1つの国や地域だけの問題ではなく全てが関連付いています。

このような段階にあって、何が最も重要と言えるでしょう？

それは、「教育」。カイヨワは戦争にはどめがきかない状況の中、僅かな可能性を「教育」に見いだしました。私たちもここ数か月、テレビなどのメディアを通して戦争の悲惨さを知り、どうしようもない無力感を味わってきました。そこで、何が起きているのかを知り、何ができるのかを考えることが重要となってくるでしょう。

かつて、日本の美術教育を先導してきた西光寺亨先生(故 兵庫教育大学名誉教授)は、「富の時代の教育は、愛と平和に生きる子供を育てなさい。」とお話してくださいました。今、その言葉がとても心に響いてきます。

私たち美術教育者にできること、せねばならないことは、「愛と平和に生きる」こととも言えます。そして、子供たちに対してできることは、絵本と共に、素敵なお話と共に、希望をギフトすることだけだと思います。

この1年をふり返る時期にあって、こんなことを考えながらクリスマスをお過ごししました。

みなさまにとって、そして子供たちにとって、幸せに満ちた 2023 年になりますように！

Merry Christmas & A Happy New Year!